

## 壁に咲く花

皿海達哉



さなえが四年生だったときのこと。

一学期が始まって、最初の授業参観があった、次の日、担任のユリ先生——川本百合子先生が、こまった顔をして、みんなにたずねた。

「ねえ、どう思う？　きのう国語の時間に勉強した詩、いい詩だと思う？　それとも、ダメな詩だと思う？」

「ハイッ」

先生は、最初に手を挙げた清水君をさした。

「はい、清水君」

「いい詩だと思います」

「どうして？」

「先生がいつも、教科書と同じくらい大切だって言ってる、補助教材のプリントに、のってたからです」

みんなが笑った。

さなえの親友のハルちゃんは、遠くの席にすわっていたけれど、

「先生、ダメな詩のはずがないのに、どして、そんなこときくんですか？」と、質問した。

「うーん、ほら、授業が終わったあと、保護者こんだん会ってあるでしょ。そのとき、ひとりのお父さんが、『この詩は、子どもだましの、よくない詩だ。授業にとりあげる価値がない』っておっしゃって、大変なさわぎになっちゃったの……」

「へえっ……」

さなえの学校では、授業参観は、給食後の五時間めにある。